

第11回（令和6年度第4回）府中市生涯学習審議会会議録

1 日 時 令和6年9月10日（火）午後2時～3時40分

2 場 所 府中市役所おもや4階 第1特別会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員10名

池田和彦委員、上野和憲委員、江崎章子委員、佐野洋委員、白信康委員、

関川けい子委員、田頭隆徳委員、立石朝美委員、長畑誠委員、中村洋子委員

※ 市村忠司委員、今関紘二委員、榎本成子委員、福田豊委員、渡邊和子委員

欠席

(2) 職員6名

佐藤文化スポーツ部長、平澤文化生涯学習課長、斎藤文化生涯学習課長補佐、

武居生涯学習係長、栗原主任、竹川事務職員

4 報告事項等

(1) 配布資料の確認

ア 資料1 第10回府中市生涯学習審議会会議録（案）

イ 資料2 令和6年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会開催（案）

ウ 資料3 第11期府中市生涯学習審議会・答申骨子案

エ 資料4 これからの生涯学習を支える「公共」の役割について 中間答申

オ 資料5 府中市文化・スポーツ施設配置等適正化計画（案）（抜粋）

(2) 前回会議録の確認

各委員に校正を依頼した前回会議録（案）について、市民に公開することが了承された。

(3) 令和6年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会の開催について、講演団体と研修内容について会長から報告があった。

5 審議事項

(1) 「これからの生涯学習を支える『公共』の役割について」

会長： 本日、当初8月30日に予定されていたが、台風による大雨のため延期となった。本来予定していた議題に沿って進めていきたい。

この審議会も今年度で2年の任期が終わるため、昨年度に中間答申を

したが、今年度は本答申をすることとなる。

審議会のスケジュールでいうと、次回は11月に予定されているため、11月では最終答申案で文章を確認していき、必要に応じて修正していく。年明けにもう一度審議会が予定されていて、そこで最終確定とする予定であるので、回数的にはあとわずかということになった。

資料3の答申骨子案の冒頭にあるとおり、資料4の中間答申で書かれたことも残しながら、最終的な答申にしていくという流れになる。本日は、この中間答申のどの部分を最終的に残すのかということではなく、今年1年間の話し合いの中で出てきたことを新しくどう付け加えたらいいのか、どのように表現するかということに集中したい。その確認後、次回に向けて、正副会長と事務局で、中間答申とどう組み合わせて、どのような形で最終答申とするのか、考えていきたい。

委員： 1点確認したい。手元の資料3は日付が9月10日になっている。事前送付時は8月30日になっていたが、内容は何か変わったのか。

会長： 日付が2箇所変わっただけで、内容は変わっていない。

中間答申の3「府中市の生涯学習が抱える課題」、4「これからの府中市における「生涯学習の拠点」の役割」、5「これからの府中市における「生涯学習の拠点」の機能」の部分について書き足したり、書き換えたりする内容として、この1年間話し合ってきたことを確認したい。

資料3の中身に沿って進めていく。まずAとして「課題」について挙げている。Bは「役割」について、Cは「機能」について、何を書き加えるか。そしてその他、付け加えたい点について整理をしたので、これに沿って話をしていく。

これまで議論したことで、資料3に記載がないということもあるかもしれないので、それは指摘いただければと思う。

まず、A「府中市の生涯学習が抱える課題」に書き加えることについて、この1年間の中で段階を追って、文化センター、公民館について話をしたので、それに関する課題がA-1にあり、文化センター以外の多様な施設との連携について話をしたものがA-2である。そして、A-3は主体的学習者についてということで、この分け方に沿って課題を書き加えた。

まず、順番に説明をしていく。

A-1「地域の学習拠点としての文化センター（公民館）に関する課題」は2点あり、①では高齢化や学習する参加者がだんだん減っていて、活動の場が縮小しているという点と、②として、より若い世代が来たいと思える企画が少なく、多様な人たちが集う学びの場にはなっていないのではないかという課題を挙げた。

A-2「多様な施設等との連携に関する課題」では、まず「学び」とは何かという話し合いをしたので、①では多様な学びがあるが、今の生

涯学習センターでは必ずしも全ての学びに対応していないのではない
かという課題について記載した。

②では、府中市にある市内の多様な学びのリソースを掘り起こし、そ
れを学びたい人たちを繋いで活用することを記載した。そのリソースに
は、これまで話をしてきたような学校、図書館、博物館、美術館、劇場、
市民活動センター、男女共同参画センターなどもあり、また、色々な人
材や組織なども含まれるのではないかという課題を出した。

A－3「主体的学習者へのサポートに関する課題」は、学びたいと思
う方に対するサポートについて記載している。

①では、生涯学習センターには学びたいという方が気軽に相談できる
ような場所がないのではないかという課題を記載した。

②では、そもそも生涯学習センターの中で、市民による自主的な学習
活動があまり重視されていないのではないかという課題がある。生涯学
習センターとしてそれに寄り添い、支援・促進する必要があると指摘し
ている。

この課題のAの部分について、何かあるか。

委員： A－1の参加者が減っている課題について、私の手元に内閣府の令和
4年度の生涯学習に関する世論調査の結果がある。今後学習したい場所
や形態についての結果があり、「公民館や生涯学習センターなどの公的
機関の講座・教室」と回答したのは34.4%、「図書館・博物館・美術館」
と回答したのは24.2%となっている。ところが、この2つを足したもの
よりもっと多い、圧倒的1位が「インターネット」で、58.7%となってい
る。私も都立大学の公開講座をWebでリモート視聴していることもあり、
人数が減っているという課題については、他に移っているという可
能性がある。コロナ禍でリモートやインターネットが急激に生涯学習の
中に入り込んできた。

この課題の中で、高齢化や若者向けの企画が少ないことが、参加者が
減っている原因に挙げられてるが、私はインターネットに移っているとい
うこともあるのではないかと考えている。

会長： 重要な指摘だと思う。その通りだと思うので今の話は生かしたいと
思う。あえて言うならば、何でもインターネットでやれば良いかとい
う問題があり、インターネットだとどうしても個人での学習や講師と
受講者という形式になり、そこに集まった人たちで何かみんなでやる
という雰囲気にはなりにくい。

委員： 今はインターネットも双方向となっている。自由に討論できる。

会長： 講師とのやり取りは双方向でも行っているとは思いますが、例えば、グル
ープに参加した人が終わった後一緒にどこかへ行こうというようなこ

とができない。そのため、インターネットだけで良いとは私も思わないが、インターネットについては、考えないといけないと思う。

今の件で、ほかに何かあるか。

委員： 今の意見はやはりその通りだと思う。インターネットに乗り遅れているという現実がある。乗り遅れという指摘はした方が良いと思う。

文化センターでの生涯学習の不活発ということだが、文化センターと生涯学習センターでは組織や権限の問題もあって生涯学習センターが手をつけられないのではないかとと思われる。

また、今回の骨子案の後半部分の結論には驚いている。その中で、かねがね私が気になっていた、施設との連携に関してだが、連携で何ができるのか。例えば、DXで生涯学習センターを抜本的に刷新し、プラッツ、フュール、文化センターなど、それぞれ独立して工夫をして活動している施設と連携する。DXということで、横串を刺した状態で、さらにコンシェルジュやハブなどといった形で、いわゆる検索のプラットフォームの上に乗せるという、その力仕事は、作業の上でも、投資の上でも、期間の上でも、本当にできるのかということが、今回骨子案を読んだ中で一番疑問に思っている。

ハブとコンシェルジュについて記載するには、中間答申の4「これからの府中市における「生涯学習の拠点」の役割」の中に大きく内容ないようを加えないと整合性がとれないのではないかと。本日は骨子案のところだけで話を進めていくということだが、少しずつ文章表現を見直していく、繋ぎ方を見直していくということも必要ではないか。

提案にあったコンシェルジュやハブ機能について、果たしてコンセンサスを取れるのかどうか。むしろこの骨子案の後ろから逆算して見ていった方が良いのではないかという気がする。

会長： このハブとコンシェルジュが急にゼロから湧いて出てきたことではなく、色々な課題を話していく中でやはりこの2つが大切なのではないかと出てきたことである。そのため、課題の話から進めていこうと思った。

ご指摘のとおり、最初の部分について、DX化をしていくと言ったときにどうなるのかということは考えないといけない話だと思っている。その点も留意した上で、これから話を進めていければと思う。

次に、Bの「生涯学習の拠点の役割に書き加えること」について、中間答申では、単に列挙している形となっているので、最終答申では整理しなければいけないと思っている。今回の1年間の議論の中で何が見えてきたかということだけを骨子案には記載している。

A-1, 2, 3とそれぞれの1, 2, 3は対応しており、B-1は、公民館との連携、2は施設の連携、3は主体的に学びたい市民への支援となっている。

B-1「文化センター（公民館）との連携に関する生涯学習センター

の役割」については3つの点を挙げており、①では生涯学習センターから文化センターに対してもっと働きかけても良いのではないかという点と、②は逆に、文化センターで行われている様々な活動を生涯学習センターがしっかり把握をして、知りたい市民に知らせる活動が必要ではないかということを記載している。③としては、文化センター・公民館の一番のポイントは地域に根ざしているということなので、地域の抱えている課題解決に向けて学習をしようというときに、生涯学習センターのリソースである、生涯学習ファシリテーターなど、そうした人たちがちゃんと協力できるような体制が必要ではないかということを記載した。

B-2「生涯学習センターと他施設との連携における役割」については、意見が多くは出てこなかったが、①としては生涯学習センターで学んだ人たちで何か活動したいときに市民活動センタープラッツに繋がったり、またその逆の場合もあるのではないかという連携について記載した。

②は、小・中学校や郷土の森博物館という若い世代が特に学ぶ場所と生涯学習センターが繋がる必要があるということを記載している。府中市の多様な学びのリソースを掘り起こして、それを小・中学校や郷土の森博物館等に繋いで、若い世代の人たちに府中にある学びのリソースをもっと活用してもらおうようにしたらどうか。それが生涯学習センターの役割ではないかという提案になっている。

B-3「主体的に学習したい市民への支援の役割」は、中間答申にも、気軽に相談できる場所が必要であると記載したが、それはA Iやバーチャル空間も考えられるということを①に記載している。

②では、学びのリソースと繋がる話だが、どんな組織で、どんな人材が、どんな学びあいや学び返しができるのかということをしつかり情報収集して分析して共有することも、生涯学習センターの役割ではないかということだ。

③は、「学び返し」というのが府中市の1つの特色なので、ファシリテーターやボランティアが活躍する場を生涯学習センターとして意識的に作っていった方がいいのではないかということである。

この辺りからハブやコンシェルジュに近いことが書かれている。このBの点について何かあるか。

委員： B-1にある生涯学習センターで学んだ人がプラッツと連携して、さらにプラッツで活動しているグループも学習を深めるという話だが、私自身、昨年10月11日に生涯学習センターでパソコンの水彩画講座を受講して、その後毎月1回第3木曜日にプラッツで定例会をやっている。そして10月には生涯学習フェスティバルに作品を出展することになった。

そういう例があって思ったことだが、文化センターには囲碁のクラブ

やデッサン、水彩画など色々あるが、例えば囲碁をやりたいと思っても、今更何も知らないでサークルに入るわけにはいかない。

しかし、もし生涯学習センターで初心者のための囲碁講座などがあれば、そこからスタートして、そこで学んだ人が、文化センターの囲碁サークルに入っていくなど、循環がうまくできればいいと思う。ここに書いてあるリソースの掘り起こしや、文化センターの中でやっているものを吸い上げて生涯学習センターで広げるような活動をするということであれば、生涯学習センターで習った人たちがまた地域に戻るといったような循環ができるのではないかと、このような形で進めるのが良いのではないかと考えた。

会長： 囲碁の話だと、わからないけれどやってみたいと思ったとき、確かに既にある囲碁サークルに行こうと思わない。もちろんインターネットでもできるのだろうが、対面で教えてもらいたいとか、又は同じように思う人たちと一緒に学びたいと思ったときに、例えば生涯学習センターに相談に行く。そうすると教えてくれる人を紹介してくれるか、あるいは小さな勉強会のようなものを最初は生涯学習センター主導でやってもらい、その後にこの皆さんと一緒にやりませんかということでグループができて、そのときの講師は、市内でできる人をしっかり学習センターの方が紹介してくれるなどといった、そのような流れができるかもしれない。それが動き出したら今度その人たちが地域に戻ってくるという、そういう流れができると確かに面白いと思う。

委員： ただ掘り起こしと言ってしまえば簡単だが、生涯学習センターでどのぐらいデータ量の掘り起こしができているのか。この人はこのぐらいの年齢の人、この人は若くて外部の組織にも参加しているような人など、そういった情報があって初めて学ぼうとする人にとって選択ができる。与えられる情報としても、情報が羅列しているだけではなくて、自分の欲しい条件の中で、この近くで、こういう人で、というような形で検索したら、例えば生涯学習センターが持っている60人の人の中から私の検索条件に合う人は7人だった、というような検索システムが、ハブであり、コンシェルジュでなかったら意味がない。しかもそれがどこでも、自分のパソコンでも、スマホでも、探している人が見ることができなければ意味がない。そんなに大きなことが本当にできるのか。先ほど言っていた疑問と同じである。基本的な流れはわかるが、職員が知っているあの人がいいのではないかと、というようなレベルでないことをやらなければ、DXにもならないし、生涯学習センターがやる意味もないと思う。

会長： これも次のCの話になるが、今の話で言うと、データや情報をまずどのように集め、それを更新していかないといけないということがある。

逆に言うと本来はやらなくてはいけないことなのではないか。実際には、生涯学習サポーターという制度があり、そこに登録している人の情報はあつた。最初はそれをもう少し豊かにしていくということで良いのかもしれない。少なくとも情報をもっと蓄積していく必要があつて、それを使いやすいように整理していかなければならない。

次に、それは誰がどのように使うのかということだが、個人情報があるので、それを普通の人が見ればわかるということまで持つていくのは難しいのではないかとも思う。データを管理するのはあくまで生涯学習センターの中で、何か相談があつたときにはそのデータベースに職員がアクセスして紹介する、というイメージは私の中にはある。この点については、副会長はどう考えるか。

副会長： 個人情報の扱いは専門ではないが、セキュリティに関しては気をつけないといけないので、そもそも学習センターで引き受けるかどうかというところもある。1つの方法論としては、情報を提供する側がどこまでなら公開して良いということを判断するような仕組みもあるのではないかな。

委員： 個人情報の問題ではなく、検索情報について、例えばハローワークの情報を検索するとすると、地方や職種、時給などの条件で検索をする。プラッツのNPOも、フューチャーのグループも、どこにも登録されてなくて活動されているグループもある中で、そのようなことがどうやってできるのかということである。

提案はいいと思うが、実際に動かす視点で考えたときの作業の膨大さと投資の大きさを常に意識しないと、机上の空論になってしまう。その膨大な作業がある中で、どこまでを提案するのか。それとも30年後にそうならいけばよいのか。そのようなことを言つてる間に世の中は変わつてしまうと思う。

骨子の中で使われてる言葉の大きさに対して、その作業量や実現可能性を考えなければいけないことの間に乖離があるのではないかなと思つている。

会長： 今の話は、B-1で言うと②の、生涯学習センターが、文化センターを拠点として行われている市民の特色ある学習活動の把握をするということがあつた。B-2については、②に関連して、府中市の多様な学びのリソースを呼び起こすということで、B-3の②でも、どのような人材、組織があつて、どのような学び合いが可能なのかということ、情報収集・分析・共有機能を強化するという記載があり、この部分の話だと思ふ。

これらをどこまでやるのかということは確かに難しい問題かもしれないが、そもそも生涯学習センターの役割として、若い人にとってわざ

わざわざ生涯学習センターにいったって講座を受けるというよりも、それこそインターネットを通じて学べるという時代に、あえて生涯学習センターがたくさんの講座を主催する必要があるのだろうかという問題意識がある。講座をあまりやらないで良いのであれば、生涯学習センターの役割は何かと言うと、やはりまさにコンシェルジュとハブなのではないかという流れから出てきている。

生涯学習センターが今までやってきたような膨大で広範囲な講座をこのままずっと続けていくという前提は多分ないのではないか。全くやらないというわけにはいかないとは思っているので、どこの文化センターも、どこのカルチャーセンターもやっていないような講座や、社会的に必要な講座、今求められていて、安価で誰もが受けた方が良くというテーマの講座など、そういったものに絞っていけば、講座の数は抑えられるのではないか。

そうすると、生涯学習センターはまさにセンターであるのだから、それはハブであり、コンシェルジュではないかというところから出てきたものである。どこまでそれをやっていけるのかということは、確かにまだ至っていない部分はある。

そこはご指摘のとおりだと思うが、元々の出てきた真意はそういうことだということで説明した。

では次にC「生涯学習の拠点の機能」に書き加えることについて、自ら講座を提供するプロバイダとしてよりも市全体の多様な学びのコミュニティを促進するためのハブとコンシェルジュではないかということに記載している。なので、全く新しく出てきた話ではないと思っていただきたい。

今までの話し合いの中のもの言葉をしていくとこの2つになったと思ってもらえればと思う。

C-1「多様な学びを促進するハブ機能」について、「ハブ」というのは①に書いてあるとおりであるが、要するに、市内にある色々な学習リソースをデータ化して発信するという。また、検索に役立てるのは多分C-2の方に繋がってくる話になるので、あくまで情報を把握してデータ化して、それを発信するというのが②に記載してある。

それから③にはもう1つのハブ機能として、多様な学習施設とのネットワークの結節点になるということに記載した。やることは難しいかと思われるが、例えば小・中学校と他のリソースを繋いで、生涯学習センターが間に立って、子供たちの学習活動を促進するということがあってもいいのではないか。ネットワークの結節点というのはそういったイメージである。

単に生涯学習センター自体が何も意思を持たずに、そこにいると色々な情報が集まってきてそれが他の情報のところに飛んでいくというようなものではなく、生涯学習センターがこことここを繋げれば面白いというようなことを考えて、ネットワークを作っていくということだと思

っている。例えば郷土の森博物館にある面白いリソースと小学校を繋げるのが良いのではないか、そこに、高齢者の方々と学習をしている人たちもうまく結びつけたら面白いのではないか、などを考える。そういうことをやっていくというのがハブ機能の第2の部分だとイメージしている。

C-2「市民主体の学びを促進するコンシェルジュ機能」については、市民が学びたいというニーズにできるだけ対応できるようにするもの。講座をやるということより、学びを開始したい人をうまく繋いで、学習グループを育成していくということがある。このコンシェルジュ機能というのは職員だけではなく、ファシリテーターやボランティアの人たちにも担ってもらえるのではないかと考えている。

コンシェルジュそのものは、C-1のハブの中でのデータをうまく活用することでより機能的にできると思うが、例えば今の状態でコンシェルジュ機能をやるとなると、生涯学習センターで働いている社会教育主事や生涯学習ファシリテーターが相談に応じることになるだろう。デジタルではなく、アナログに市民の相談に乗って、とりあえずその人達でできることをやるというところからしか始まらないと思う。その人達が知っている情報の範囲で、こういう人たちのところへ行ったらどうかとか、こんな学習グループを作ろうとか、ということが今できるコンシェルジュではないかと思う。

委員： 学校と博物館を繋ぐことはいいかもしれないが、学校にはカリキュラムがあり、先生がいる。その中で生涯学習センターが出て行って、2つを繋げたらどうかなどと考えるということ。それと同時に、例えば自主的に既に学習活動をしているグループに対して、こんなことをやったらどうかなど声をかけることによって、自主的な学び活動を阻害するおそれもあるのではないか。言ってみれば余計なお世話というようなこともあるかもしれない。

例えば、同じ囲碁をやっているグループはいくつかあるが、うちはこのいうコンセプトでやっているなど、コンセプトの違いの中でそれぞれが自主的な活動をしている。コンシェルジュをするためにはそのコンセプトまで把握しておかないと繋ぎようがない。行ってみたら話と違う、と言われてしまうと今度はクレームに繋がってしまう。そういった意味で、どこまで情報を把握するかという問題がある。

やりたいという人に対してどこまでサポートするのか。職員も給料をもらってその業務をしている。やりたいという人達の思いはとても強いが、例えば2人しか言っていないというようなことに対して、職員の業務能力をどこまで振り向けてあげなくてはいけないのか。職員ではできないからボランティアやファシリテーターでやると言うのは筋が違うのではないか。

コンシェルジュをするにしても支援をするにしても、やはりある程度

の条件や、このサポートをすることでこういった効果が期待できるのかということを中心にプレゼンしながら、私はこのサポートに対して何時間または何日間かける予定であるということに対してチェックをするような組織、ルールがないと、何でも親切にお手伝いをするというのは良くないのではないかと思います。

例えば製薬企業では、日本に70人くらいしかいない難病の患者さんの薬の開発には莫大なお金がかかるが、それでもその薬の開発をしなければならないということがある。生涯学習の中でどこまで希少な要望に対応するのかという基準はどうやって持つのか。また、それを誰がどうやってチェックするのかというようなことも、背後で考えながら提案していかないといけない。来年からやると言われたときに、やり方は考えていませんというわけにはいかない。

会長： どこまでやったらいいのかということもしっかり決めていく必要があるということ。また、それを誰がやるのかということで、権限の問題もある。確かに学校はなかなか難しいと思う。しかしそこは、市の政策として学校としっかり繋いでいこうというものがあればやりやすいかもしれない。政策とも関わってくる話だと思う。

長い目で見て、こういう方向に進んでいくべきではないかという話と、これはすぐにできるのではないか、やってみたらどうかという話は、分けた方がいいのかもしれない。そこについては考えたい。

今日最後に施設の配置の計画案の話がある予定だが、今の生涯学習センターが次の新しい場所に移って新体制になる。その先のことを見据えての話だと思っている。実際問題としては今の指定管理者が令和7年度で終わるため、来年のうちに次の指定管理者を決めないといけない。次の指定管理者を来年度のうちに決めるための仕様書などを作るには、方向性の中でこれはやる方がいいという部分と、長い目で見たらこの方向に向かって動いていくべきではないかということをは分けて書かないといけないと思う。その仕様書をどうやって書くかという話になると思うので、ご指摘の通りだと思う。

ハブとコンシェルジュという考え方自体についてはいかがか。

委員： 私自身はコンシェルジュデスクという形で創設するのは賛成である。コンシェルジュには色々あると思うが、コンシェルジュを育成する団体もあれば、派遣する団体もある。例えばクレジット会社は素晴らしいコンシェルジュがいるわけだが、そういったところからノウハウを聞いて、どういうことが必要かというのを掘り出して、まとめていくことが必要ではないかと思う。その中で今言われていた個人情報の問題なども出てくると思うので、そのノウハウを後で利用して進めていけばいいのではないかと思う。基本的にはコンシェルジュデスク的なものが必要だと私は考える。

会長： 社会教育の場面でいうと社会教育士という称号を文科省が作って増やそうとしているので、そういう人たちをうまく使うというのはあるかもしれない。

委員： C-2のコンシェルジュ機能について、①に「多様な要望に対応し、総合的にお世話をする役割の人を指している」との記載のとおり、総合的な世話係ということ。ほとんどのコンシェルジュはその場限りで終わる。その場で解決すればそれで終わり、自分で解決ができない場合、プロフェッショナルに繋げるということで、普通コンシェルジュはそこで役目を終える。それを②で、生涯学習におけるコンシェルジュ機能とは、ということで定義し、「市民による主体的な学習ニーズに対応し、「学びたい人」「さらに学びを深めたい人」「学び返しをしたい人」の相談を受け付け」とあり、ここまではいい。次に、「学習グループの育成も含めて」と記載がある。学習グループの育成というのは、人を含めて育成という形になる。人も含めて育成し、そして「市民が主体的に学び続けられるよう支援するものである」と、継続して本当にそのようなことができるのか。コンシェルジュの部分で大きな問題だと思う。③に書かれている、「コンシェルジュ機能は、生涯学習センターの職員だけでなく、生涯学習ファシリテーターやボランティアによって担われることも可能である」という部分は、おそらく無理だと思う。コンシェルジュも人によって、ハイレベルの方もいればローレベルの方もいるという。どこを目指すかはわからないが、個人のレベルによるのではないかな。

そういう部分に対して、ファシリテーターやボランティアに押し付けるような感じがして、少し行き過ぎではないかと考える。検討してほしい。

会長： 本来のコンシェルジュであれば入口だけで、そこから先は別の方にも任せられるということがあるかもしれない。そのイメージでいくと入口としてどこまでやるのかということを書いた方がいいかもしれない。

例えば、図書館の司書の役割で、レファレンスということがあると思うが、このことについて知りたいと言うと司書の方が色々と調べてくれて、提案を受け、そこで終わりになる。その先はどうぞご自由にという形だと思うが、生涯学習のコンシェルジュはどうなのかという話だ。こういう人がいるとかこういうところに行ったらどうかなど、そのぐらいで終わるのか。それ以上のことを支援しようと思うと確かに大変である。

委員： 検索システムの性能が良いものがないといけない。

会長： 確かに情報があればその情報を見せて、やってくださいと言える。

委員： その検索システムの上に何か情報を載せられそうな気がする。例えばインターネットで本を買うと、書評は買った人が登録して書いている。それが評価として出ていて、それを参考にすることもできる。既にあるシステムはできているものを繋ぎ合わせて作るが、入れる情報は、プラッツに頼む、プラッツの登録しているNPOに頼む、フューラルに頼む、文化センターに頼む、文化センターで教室やってるグループに頼む、というような形にしていけないと情報がたまっていかない。PDCAということがあるが、参加した人や検索した人の声が見えるというようなものも良いと思うし、今度それを出されたら、それに対する答えを出すのは、生涯学習センターなのか、組織の人なのかという問題も出てくる。

今は平べったいものがホームページに載っているだけで、どこでこんな活動をしているという、紙と同じものが画面で見えるだけで、それをもっと立体化していけないといけない。単に活動の写真で楽しく撮れてるものだけが掲載されているのではなく、もっと立体的にインタラクティブな状態で情報を蓄積していこうと考えないと、やはり使い勝手が良くないと思う。

その検索方法や、キーワードの入れ方について、こう入力するとちょっとひねった活動をしているグループが見つかるかもしれないというようなアドバイスはコンシェルジュとしてできるかもしれないが、勝負は情報量と検索のプラットフォームだと思う。

会長： プラッツの話が何度も出てきたが何かあるか。

委員： プラッツに関して、それぞれの団体の情報をどうしてるかというところ、コロナになる前までは紙申請ということで情報は全部職員が手入力をしていました。

ただ毎年度末400団体の情報を職員が手入力するにはもう限界だということで、コロナのタイミングと合って、団体自身がデータを入力する形に変えた。ちょうどコロナで閉館したときに切り替えられたので、現在は、データ入力ができる団体は団体の責任で、過去の情報も全部、毎年度末に更新をするということをしている。8割ぐらいの団体は、団体自身で入力してもらっている。プラネットというポータルサイトで、キーワードや活動地域で検索できるようになっている。

ただ、デジタルを苦手とする団体については今でも紙申請をしたり、あるいは職員がカウンターで入力を手伝ったりして、プラッツに登録する全団体がプラネットに掲載することとなっている。また、公的な活動をしている団体は登録団体でなくても掲載できるので、11月にある協働まつりの際は、府中市の課もプラネットに載せている。

情報は基本的にそれぞれの登録団体の責任のもとということになっているため、問い合わせ先なども団体が公開して良いかどうかを判断して、公開して良い情報を載せるということで、定着してきた。

まさに共通の検索のポータルサイトの的なものがうまく活用できれば、うまく結びつくのではないかと思う。

委員： 年に1回登録しているが、登録した後プラッツへ来館することになっているのはどういう意味か。自分で入力できれば来館は不要ではないか。

委員： 登録はネット上でできるが、いわゆるヒアリングということで必ず受付に来ていただくようにしている。コロナ禍ではできなかったこともあったが、コロナが終わった後に再開した。

どこかと結びつけるというところでは、やはり団体と顔が見える関係でなければいけない。団体名簿については、以前は紙を全部預かっていたが、今は個人情報のこともあり預かっていない。紙での申請をやめてからは、登録されている活動メンバーについて見せてもらい、市内何人、市外何人という確認をしてその場で返すことになっている。幽霊会員のよう登録ではよくないので、一度は対面で今こういう方が活動されているということで、来館してもらうことにしている。

400団体なので最低400人が来るが、絶えず受付には日中2人いて、受付にいる者が顔を合わせるため、必ずどこかの団体と話をする機会にもなっている。職員もそれぞれ役割はあるが、その事業担当だけが団体のことを知っていても、色々なことをやっていく上では仕事にならないと思っている。対面で話したことを周りの職員と共有しているので、来館してもらう意味があると思って、そのような登録の仕方をしている。

個人的なことだが、以前川崎市麻生市館で、生涯学習相談員の養成講座を受け、相談員をしていた。川崎市のどの区でも、それぞれの市民館で養成講座をしているようで、大体4回から5回ぐらいの講座を受けた者が生涯学習相談員として水曜日の午前・午後2人ずつ、受付の前にいわゆる市民ボランティアとして座って、生涯学習相談員として相談を受けていた。相談といっても、細かいことまで言うわけではない。例えば、団体を探しているというような、最初の相談を受ける。それを月1回相談員が集まった定例会で職員と情報共有をして、今月こんな人がこんな相談をしたということをまとめる。専門的なことであれば職員が対応する。窓口でこのような団体を探していると言われて、検索して示せるくらいで用が済めば、川崎では生涯学習相談員がやっていたと思う。

会長： そういう形もある。場所を作って、データを整備することで、ある程度の講座を受けなければならないかもしれないが、市民ボランティアでも相談、コンシェルジュの役割を果たすこともできるかもしれない。あとは400人と顔を合わせるというのもやはりそこが大事だと思われるということだった。

委員： ただ、絶対に来館が難しいという方については、電話での対応もある。

委員： 生涯学習センターと文化センターでも登録があるが、プラッツのような登録のやり方が早いかもしれないと思った。そういったやり方がよいと思う。

会長： 今は府中市の場合は基本的に紙ベースで登録をしているということだが、これもデジタル化することが必要かもしれない。やってできないことはないと思う。

委員： 難しい課題であると思って聞いていた。C-1の③でいくと、確かに先ほど意見があったような小・中学校のカリキュラムを度外視してやるのかという話はあるが、30年後の府中市を考えたときに、小・中学生は明らかに地域の中長期的な潜在母集団なので、ここを無視して生涯学習を語るのはありえないと思う。学校の宿題や課外学習の一環として、子どもたちにこういった施設があるとか、こういった団体があるとか、こういった学びがあるということを知ってもらうきっかけが必要だと思う。

私の子どもの頃は今みたいにインターネットやゲームがなかったので、公民館に行って漫画や本を読んだりすることを当たり前にしていた。娯楽が増え、子どもがあまり文化センターや生涯学習センターに行かなくなってきたのではないか。その辺りはやはり学校通じてこういった学びがあるとか、文化センターや生涯学習センターを使って学ぶ機会、宿題をする機会があるということを経験させることは必要なのではないかと思う。

C-2に関してはまた批判的な話になってしまうが、このコンシェルジュ機能について、AIが最も得意な分野で、よっぽど優秀かもしれない。

今会社で何が起きてるかという、対面でやった方がいい研修とオンラインでやった方がいい研修の2つに二極化している。オンライン学習サイトも盛り上がっている。技術的な研修など、1人で学べるものはオンラインで学ぶ。それに対して対面の研修は、直接コミュニケーションが必要なもの、体を動かす必要があるもの、施設が必要なもの、この3つのいずれかが必要なときに、対面の研修が実現する。企業も、対面でやった方が学習効果の高いもの、もしくは対面でやらないとできない研修に関しては対面で実施している。そういった機能の区分けとして、オンライン化すべきなのか対面で実施すべきなのかという、機能の区分けを府中市の生涯学習機能としても考えていく必要があるのではないか。

DXというと、それこそハコ物を不要とする、つまり生涯学習のやり方を革新することなので、そういった舵切りをするに当たり、どの部分でDXにするのか、どこは人の機能を残すのか、取捨選択が必要になっ

てくるのではないか。

また、小・中学校の子どもたちが中長期的な生涯学習の母集団として、府中市を愛して府中市の生涯学習を利用するというのも大事だが、他には、現在未婚率が上がっている状況なので、未婚で独身の方、離婚して1人になる方もこれから比率は増えていくだろうと考えると、未婚の方々に対して1人で孤独にならないように、生涯学習を通じてコミュニティをつくるような仕組みも何かあるとよいのではないか。1人ではない、府中市には友達がたくさんいる、一緒に学びましょうというような、そういった取組の仕掛けとしてはよいのではないかと思った。

委員： 今言われたとおり、テーマによってリモートにするのかどうかということは、例えば先ほどのパソコンの水彩画講座はリモートでは無理だったと思う。生涯学習センターには高性能なパソコンが並んでいて、プリンターもあって、みんなで同じことに取り組みながら、プリントアウトして評価して、意見を言い合ったりするので、これはリモートでは無理だと思う。生涯学習センターの講堂講座はリモートにしてもよいと思う。

なので、テーマによってリモートでよいものとリモートではできないものは確かにある。一概にオンラインでやれば良いということではなく、区分けしなければいけないと思う。

また、C-3の一番下にGXという非常に格好いい言葉が書いてある。施設のGX化とあって何があるのか。言葉としては綺麗だが、カーボンニュートラルということで木造の施設を作るという話なら別だが、実際にDX化は必須だと思うが、施設のGX化は無理ではないか、言葉だけで終わってしまうのではないかという気がする。

会長： 私はやはりCO2排出を減らせば良いという話ではなくて、今の話の木造にするなどの排出量を減らすやり方も良いとは思いますが、身近に自然がない暮らしはそもそも人間として変だと思っている。

そういう意味で、街中にもっと緑があっていいところなので、木が1本あるだけでもいいと思う。GXについては、副会長の方から話あったので、何か補足をお願いしたい。

副会長： 府中市の紹介表現で、多摩川の豊かな自然というが、そこで水浴びをしている市民はいるのかというと、いないと思う。やはり身体性の学習の重要性も先ほど意見が出たが、身体性を確保するためにも街にはやはりコンクリートよりは草木があった方がいいと思う。個人的な思いでは、木造でも強度が保てれば、人口も減っているので高層にすることもなく、低層で強度のある木造建築で十分ではないかと思っている。

委員： GXについて、木が1本などという話ではなくて、普通にGXと言われたときに、一番はペーパーレスで、要するに木を伐採しないというこ

とである。長い流れの中では、ペーパーレスにするとか、リモートで業務をして出社しないということもGXと言われている。

委員： C-1の①でハブはこういう意味を持つようになったと書かれていて、ハブという言葉はハブ空港などで普通に使われていると思うが、C-2のコンシェルジュ機能のコンシェルジュはホテルではよく聞くが、これは広く使われるようになっている言葉なのか。

ホテルのコンシェルジュというと、問い合わせについてお客様が納得するまで、あるいはコンシェルジュ自身が納得できるまでお客様に寄り添い、何とかその問題を解決するというようなものを想像する。コンシェルジュと言っても、先ほど話が出たように、どこまで行うかは別として、相談に乗ってできる範囲で行い、後はプロに引き継ぐというものなのか。徹底的にお世話をするというような意味に捉えられてしまうかもしれない。コンシェルジュという言葉の使い方をほかではあまり見かけないので質問したい。

会長： 私も調べたが、あまりないかもしれない。ホテルだけではないと思うが、どちらかというと観光業界的な言葉かもしれない。そういう意味では、この言葉で良いのかどうかというのも考え、悩んだが、ほかに何かいい言葉があるか。

副会長： 私は「御用聞き」という言葉を思いついた。ことばの意味に何か目新しい機能を導入したいときには、横文字にするのが日本人だが、コンシェルジュは日本語では「御用聞き」ということだろう。次のステージはおそらく「指南」、次は「伴走者」というように、日本語で良いのではないかと思う。

ただ答申に記述する観点からすれば、このコンシェルジュというのは御用聞きのことであるなど、定義して書けばよいのではないか。その他の言葉だと、「御用聞き」、「御用伺い」などが一番良いと思う。

会長： 入口でお世話をするが、ずっと最後までお世話をするわけではないということは入れておかないと大変になると思う。また、コンシェルジュという言葉で通じるのかどうかという点では、同じ意味のいい言葉がなければ、定義をする必要があるかもしれない。

委員： 先ほど施設の今後の話が少し出たが、府中駅周辺の3つの公共施設を将来的に複合化するという話を耳にした。その内容が、中央文化センター、保健センター、ふれあい会館の3つの施設と第2庁舎も関わってくるとのこと。中央文化センターはもうなくなってしまうのか。以前、中央文化センターの位置に生涯学習センターの文化面を移すという話があると聞いたが、それは3施設が着工して竣工後の話になるのか、もし

わかれば教えてほしい。

会長： 本日最後に施設配置計画の説明が事務局からあるが、私が理解している限りで言うと、生涯学習センターを今の場所から中央文化センターの場所に移すということまでは聞いている。ただ中央文化センターがなくなっても生涯学習センターなるのかというと、多分そうではないと思う。あくまで生涯学習センターという府中市の唯一の機能を中央文化センターの敷地に移すということ。今ある中央文化センターがどうなるのかということは私もきちんと聞いてないが、文化センターは他にもいくつかある公民館の1つなので、その機能自体がなくなるということはないと思う。

委員： 文化の部分とスポーツの部分に分けるとなったときに、スポーツに関しては、生涯学習ではないという区切りになるのか。

例えば、「道」とつくようなスポーツで、剣道などは生涯学習として捉えるべきではないか。スポーツ施設で運動としてやってくださいということでもいいのか。

会長： それは確かに大事なポイントで、今の計画では、生涯学習センターのスポーツ部分を離すことになっているので、次に来るべき新しい生涯学習センターについては、学習の話だけをしてきた。しかし、生涯学習の中にスポーツが入らないかということ、今までこの話し合いの中ではそこまではしなかったという理解である。この点について事務局から何かあるか。

事務局： 生涯学習センターの今後については、現在、文化・スポーツ施設配置等適正化計画の案が示されている。現在の生涯学習センターには体育機能があるが、これは新総合体育館の方に統合される想定であり、新しい生涯学習センターは中心市街地の方に移転をすることになるが、そこにはスポーツ機能は残らない。新しい生涯学習センターを考える上ではその部分については審議会で検討はしていただいていないところである。ただ、スポーツにおいても軽度の身体を動かすような活動は学習の中に含まれると考えられる。広い意味ではスポーツ全般も社会教育・生涯学習に含めて捉えることもできるため、その部分についても審議会で提言があれば、そういったことも勘案して施設整備を考えていきたいと考えている。

委員： 今なぜスポーツについて聞いたかということ、先ほどの検索データの件として、スポーツが入ってくるとまた膨大な量になるということがある。この施設でどんなグループが活動していて、どういう行事があるかということ、文化・学習だけではなくスポーツが入ってくるとなると、や

っぱりデータが増えることになる。

会長： 生涯学習の定義の中から考えるのか、データとしては何を収集するのかというのを線引きする話かもしれない

委員： スポーツも生涯学習の範囲なのかどうかと言われると、SDGsの観点から言っても、生涯学習の中にあると思う。

会長： 最後のページには、「付け加えたい点」について記載してある。

そもそも、今回の諮問事項は「これからの生涯学習を支える「公共」の役割」ということだったので、今まで生涯学習センターの役割と機能を中心に話してきたが、「公共」の役割は何かというときに、持続可能性を考えなければいけないということを記載した。持続可能性を考えるに当たって、調査・分析をしてこれから計画的かつ総合的に生涯学習事業をファシリテートするということを入れているが、これについてはどうか。

このまま残すか、全体の流れでこれはなくても良いということかもしれないが、ただ諮問事項は「公共」の役割ということなので、持続可能性を考えてほしいというぐらいの書き方になっている。

委員： この最後の部分について、言ってることはとてもよくわかるという印象を持っていて、確かに「公共」の役割というのは持続可能な状態で育成していくことだろうと思う。

例えば、安いから、流行ってるから、などといった一過性のものではなく、本当に持続可能で、誰でも入れるというような形で維持していくことが大事だと思う。

また、意外だったことだが、府中市に還元されていくというイメージがやはりある。生涯学習に触れた中で、学んだ中で、府中市民として得たもの、人的なもの、組織的なもの、施設的なもの、というようなところで地域の愛着や地域感覚というところに還元されていくのではないかな。

いわゆる「学びのコミュニティ」や「学び返し」ということを考えない状態でも、愛着という形で府中市に戻ってくる、学びが返されてくる、循環していく、というようなサステナビリティについては、やはり公共の役割であると捉えられる。「鍵となる」という言い方ではなく、むしろはっきり言ってしまえば良い気がする。

会長： 地域のアイデンティティや愛着を持ってもらう人たちを増やすことが、正に府中市の発展に繋がるということだと思う。その辺りも書き込んでみても良いと思う。

本日はここまで、特にハブとコンシェルジュについて、また、データ

について意見をもらった。元々の中間答申とどう繋げていくのかということも含めて、正副会長と事務局で検討し、次回は答申案という形で事前に送付し、また話し合っていければ良いと思っている。

6 その他

- (1) 府中市文化スポーツ施設配置等適正化計画案のパブリックコメント手続等について、事務局から計画案の生涯学習センターに係る部分について報告した。
- (2) 次回の審議会の開催時期について、令和6年11月29日（金）の午後2時から府中市役所おもや4階にて開催することで、了承を得た。